経済コラム

58

使ってみましたか？ チャットＧＰＴ

ぶぎん地域経済研究所 専務取締役／チーフエコノミスト　土田　浩

「チャットＧＰＴ」という目新しい単語が新聞・雑誌を賑わしている。文章で質問や依頼をすると、驚くほど自然な言葉づかいで瞬時に丁寧な答えが返ってくる、対話型のＡＩだ。昨年 11 月に米国・オープンＡＩ社によって公開されて以来、世界中で利用者が爆発的に増加している。

実際に使ってみた方はどれ程いらっしゃるだろうか？　インターネット環境さえあれば無料で簡単に始められる。日本語での質問・依頼には、日本語で回答が来る。お礼状や挨拶文などは、いとも簡単に作文してくれる。具体的な情報を追加すれば、答えの文章もどんどん臨場感を増す。過去に自分が実際に出したメールなどを学習させると、自分らしい文章が出てくる。汚い言葉を使わないとか、頭ごなしに否定しないといった礼儀作法もしっかり学習済みである。

チャットＧＰＴは誤った回答をすることもあるので、正確性を期す場合には別途事実確認が必要となるが、例えば人生論とかコミュニケーション論のような多くの人が論じているテーマついて、手っ取り早く最大公約数的な回答を得るには便利極まりない。ビジネスへの活用も始まっている。的確に指示をすれば、製品のキャッチコピー案を生成したり、企画書スタイルにまとめたりしてくれる。カスタマーサポートの返信メールの作成などにも活用可能だろう。

近い将来には、一段と機能が向上することで、さまざまな用途が想定される。イメージしやすいのは、教育・研修の分野である。例えば、はじめに「自分は新入社員です」と伝えておけば、そのレベルに合わせた内容を説明が返ってくる。質問を積み重ねていくことで、その人の関心事項や知識不足の傾向を読み取り、家庭教師のようにパーソナライズして説明してくれることだろう。

また、弁護士や医師といった高度専門職の仕事にも、貴重な右腕となり得る。その分野の高度な情報を集中的にＡＩモデルに学習させておくことで、あたかも自分の記憶を引き出すように、過去の事例などを即座に洗い出してくれるだろう。

一方で、こうした生成系ＡＩの使用法を巡っては、さまざまな議論が巻き起こっている。大学におけるレポート・学位論文への使用の可否、サイバー攻撃プログラムやフェイクニュースへの悪用リスクなどである。また、イタリアの当局は個人情報収集の懸念から国内での使用を一時禁止したほか、Ｇ７でも規制のあり方が議題となるなど、政府レベルの議論も活発になっている。

それでは、一人のビジネスパーソンとして、あるいは一企業として、こうした革命的な技術にどう向き合うのがよいのだろうか？

まず言えることは、こうした優れものが世の中に出現した以上、それを傍観してしまうと、競争上大きなハンディになるということだ。新技術の得意技をよく理解したうえで、柔軟に想像力を働かせながら、使えるところには使うという姿勢で臨む必要がある。

また、これを活用するには、的確な質問力や情報提供力が極めて重要である。漠然とした質問には、それなりの回答しか得られない。どのような状況で、何を目的として、どのような疑問を持ち、具体的に何をしてほしいのかを、簡潔明瞭にＡＩに伝える能力が、回答の有用性を左右する。常日頃からそうした思考プロセスを鍛えておくことが望ましい。

加えて、人間の方が優位性を持つフィールドでは、自分自身が判断を下すという主体性も忘れてはならない。例えば、豊かな創造性や、深い洞察力、主義・信条などのアイデンティティは、ＡＩ任せにできないことだ。ＡＩのメカニズムと限界を理解することで、ＡＩに魂を奪われることのないよう注意したい。

いまはまだ 2023 年の折り返し地点手前ではあるが、「チャットＧＰＴ」が今年の新語・流行語大賞になりそうな予感がしてならない。仕事の合間に少しだけでも、この最新技術に向き合ってみるのも面白いのではないだろうか。